

[ドウシ・テ]

道志帖

Spring 2018 no.19



道志の民話 ① 御堂沢の黄金の仏さま(二) 久保地区

そりゃあ、旅の土方で、道志に来ていたものが。この久保という。久保の円福寺というお寺がある。

その円福寺のお寺の前に、お堂があつたわけ。

そだか、お堂のあつた沢を、御堂沢という。いまでも、御堂沢と呼んでるが。そのお堂に、金の仏様がたつてあつたわけ。

それを盗んで、その旅の土方が、盗んでもつて、出掛けて来たところが。

灼かな(「光り輝く」)仏様だから、持ちきれねえで。

そえで、大室指の手前の、いまでも、光淵というのがあるよ。

そこえ、うつちやつて(「捨てる」)、つんぐれちやつた(「はぐれちやつた」)。

そこを通るものや、魚釣りなんぞ行きやあ、川中で、光つて、「ちゃかちゃ

か」光つてるわけだ。

その仏をうつちやつあ、放り込んでいったから。で、光淵という。

それが、荒れごとでもつて、流され、津久井の城山のダムという。あそこの

枝沢に、下道志というがあるだ。

そこの、もとのこんだから、庄屋さまが、城山の岸に行ったところが、

立派な仏があるという。それを拾つてきて、そして、うちにもつてきて。

それを村の衆が、みんな信仰に行きやあ、病氣だろうが、なんだろうが、

みんな教えてくれて、有り難い仏様でいつたわけ。

そして、一晩、庄屋さまへ、夢枕に立つてえ、その仏様が。「おりゃあ、この奥

道志の久保というところの、御堂沢という、お堂の本尊で、いるから、そこへ

ぜび、ひとつ、けえしてくれろ」と。そういう夢枕に立つたわけえ。

ほれから、けえそうと思ったが、あんまり有り難い仏様だから、それじゃ

あ、「ここを、下道志と名をつけ、下道志の久保の御堂沢のお堂というを、作

つて、そけえ(「そこへ」)、おりするから(「置いておく」)、ぜび、いつてもらいたい」

と、いうでえ、それで、下道志というができたわけえ。

道 志 手 帖

Spring 2018 no.19

Contents



表紙写真

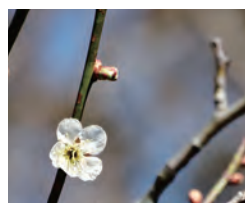
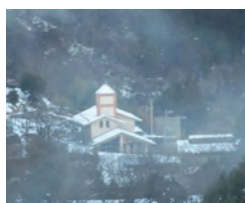
(2015.2.10)

道志を訪れたアーネスト・サトウが注目した「痩せ馬」。使われなくなった今も大切に保管されていた(竹之本にて)。

What's
"Doshi-techo"?

「道志手帖」とは？

略して「ドウシテ」。「どうしてどんなところ？」という関心から生まれた、道志村地域おこし協力隊を中心とした有志による冊子です。村で生活していて気になったこと、おもしろいなおもったこと、発見や驚きを、年4回報告していきます。2016年度からは新しい書き手による誌面をお届けします。書き手は常時募集しています。どなたでもお気軽にお問い合わせください。



[特集]

アーネスト・サトウと

道志の旅 …4

[連載]

[新連載] 道志の民話①御堂沢の黄金の仏さま(二) 仲井義晶 …2

どうしの山 山みちマップ⑦今倉山と菜畑山をつないで 石川敬子 …8

ギャラリー「小正月のツクリモノ」 …10

協力隊だより⑱ …12

道志手帖トピックス・蜂塚 …15

野の幸山の幸④沢蟹 …15

お仕事拝見⑧坂本雅央さん 仲井義晶 …16

みなもと体験館イベント参加⑧磨くⅡ 佐藤八重子 …16

アーネスト・サトウと

道志の旅

特集

2018.1.2 秋葉山から望む富士山と道志谷（撮影：石川敬子）

stitute has been sent out by the gardener, who had supplied the first, but this seed had broken down at Kurosu. I got up abt. 6, having left home at 8 the morning.

25. A man...
landlord...
woman...
a while...
glad to carry my baggage for the whole

アーネスト・メイソン・サトウ (1843-1929)

イギリス人外交官。日本に滞在していた通算 25 年間に日本各地を旅した。18 歳のときにイギリス公使館の通訳生として初来日。6 年半滞在し一時帰国。再び来日し書記官として 1870 (明治 3) 年から 12 年間活動した。この間に日本内陸を旅し『日本旅行日記』(平凡社)を執筆。「富士山を眺める旅」は 29 歳の頃のこと。日本語が堪能で、日本の民俗や歴史、宗教などを研究。方言や植物なども調査して記録に残している。



明

治の頃、イギリス人の外交官アーネスト・サトウは、日本各地を旅しました。

その記録が『日本旅行日記』(※)という本にまとめられています。

この本は、1872 (明治 5) 年 1 月の、富士山を眺める甲州街道の旅から始まっています。東京から大月や都留を経由して山中湖へ行き、復路には道志を通る旅です。この記録を見ると、通った地名や日時、目にした風景などが詳細に記されていて、当時の富士山周辺の村々のようなすが目に浮かんでくるようです。また、この界限に長年暮らしてきた人にとっては、馴染み深い地名がたくさん登場していて驚くとともに、それらがどのように語られているのか、興味深く読み進めてしまうことでしょう。

今回の特集では、そのなかから道志に関する記述を抜き出してまとめてみました。アーネスト・サトウがどのように道志を評しているのか、また、記録に登場する美しい景色は、どこで、どのようなものだったのか。そして、何が変わり、何が変わらず今も村に残されているのか。場所や眺めを推測できそうな描写の数々が、往時に思いを巡らし想像する楽しみを与えてくれます。

旅程



(前川清治『道志七里物語』69 頁の図版を元に作成)

※アーネスト・サトウ (1992)『日本旅行日記 1・2』(床田元男訳) 平凡社。

7 駕籠かきをかえ先に進む。
川原畑を過ぎその後すぐに
 岸までくだり、川を渡ってしばらく進む。
 そしてまた長めの橋を渡って元の左岸に戻り、
 右に曲がり4時10分に竹之本に着く。
 家はまことに暗く、そして汚い。
 道のりを誇張されて教えられたようで、
 私たちはここで一泊することに決めていたものの、
 到着が早過ぎたうえ宿がこれほど汚いことから、
 どんなことがあっても先へ向けて出発することにした。

8 私たちは2人ともに、小善地まで残りの道を歩いて
 5時に到着し、そこで素晴らしい宿を見つけた。

竹之本からの途中には、魅力的な景色がいくつか見られた。
 一つは溪谷を見おろす美しい眺めであり、
 そして非常な急坂のために、人一人が荷を運ぶ小馬くらいしか
 通れない場所で、また一つ素晴らしい景色が得られる。
 昨日と同じように月光を浴びて露天風呂に入った。

9 溪谷をくだる際、時々富士の頂上が見えた。
 その谷もまた、桂川溪谷ほど壮大では
 ないがぐんと美しい。名主は佐藤小佐衛門。



12 ある女性たちに宮ヶ瀬までの距離を尋ねると、
 7里くらいだと思いが女であるから
 確かなことはわからないと言った。

1月23日 甲州から相州宮ヶ瀬へ

10 8時45分小善地を出る。
 アダムズは駕籠に乗り私は歩く。
 小川におり立って渡し、
 凍り付いた道を登って山陰を進む。
 そして川の中の美しい青緑色の淀みに
 又おりて行き、橋を渡った。
 2種類の鹿と猿（野猿という）、
 雉子を何羽か載せた二頭の荷馬とすれ違った。
 登り、くだり、また登り、そしてまた
 川へと長いくだりとなり橋を渡った。

13 再び登りになり、それから笹久根という
 小さな村落へと向かって少しくだった。
 その後二つの窪みを回って9時55分に
 宿泊可能な立派な家がある久保に着いた。

14 大室指山という山を半分ほど登ったところで、
 谷の反対側に大室指がスイスの風景のような具合に見えた。
 前方には神之川山、あるいは青根山が見える。
 私たちはそれを反対側の日野で、富士の左側にそびえていたのを見ている。

11 大室指の村落で、
 木立の裏の山道を右に登り、
 小川の急な湾曲によってできた
 半島のような地山を、橋を渡って横断する。
 この辺りに滝があるが、
 それは日中は陽光の熱で融け、
 夜になると凍り付く [七滝を指している]。



15 大渡というさして重要でない村落に向
 かって、非常に険しい山を登っていく。
 窪みはここで左に曲がり、
 山道は山腹をかなりの間登っていくが、
 次に月夜野に向かって徐々に降下して行き、
 そこを過ぎるとやがて急速に川へ向かってくだる。

16 小善地と青根間の溪谷では、私が日本ではまだ
 目にしたこともない、非常に美しい景観が見られる。

1 夜間私たちの部屋は
とても冷え込んだので
アダムズの壺に入れた
インクが凍ってしまった。
又、朝の掃除でベランダへ
こぼれた水もたちまち氷に
なってしまった。
アダムズは凍ったインクの
氷塊から小片を取り出し、
ペン先につけて
火鉢で融かしてから
字を書いていた。
8時25分に出発した。
アダムズは駕籠に乗り
私は徒歩で、湖に沿って
長池に向けて進んだ。
この人々は、
今朝響いていた音は
風が氷の縁を掠めて下に
吹き込み、そこで出口を
失って発生したものだと
いつていた。
平野に進み、
湖に少々突き出ている岬を
横切る。
富士見十三州という
地図は間違っている。
湖の本当の形は
左側に異様な突起物のある
西洋梨のようなものだ。
その中では鮎、鯉、
あかっぱら、鰻、
八目鰻がとれる。
私たちは右側に分岐する
道を取り、その後すぐ
平野に9時55分に到着し、
駕籠を待ちながら
20分過ごした。
やっとのことで
漆塗の竿のついた
僧侶用の駕籠が見つかった。
農民はすべてニッカーボッカーを
はき、藤の樹皮で編み上げた
2枚の脚絆を子牛の革で
縛りつけているようだった。

2 10時15分再び出発し、
かなり長い距離を雪の野原を越えて行き、
尾根の狭いジグザグ道を山伏峠の頂上に向けて登る。
尾根は樹木の茂った山間にそびえるナイフの刃のようだ。
上りは平野から40町で、白井平までくだと70町になる。
山腹に積もる雪で山道は狭められ、徐々に降下して行く。

3 一匹は黒であとの二匹は白の小振りの猟犬を連れた
猟師の団が獲物を求めて歩いているのに出合った。
ここでは熊が多く捕えられる。
熊は雪の上を隠れ家の穴まで追われるのだが、
その穴を雪で蓋をされてしまうので
無理やり外に出されたまま撃たれてしまうのだ。
時々熊はてっぺんから頭を出したり、
横から手を出したりしているが、
それは火縄銃の狙い目となる。
彼らを刺戟しない限り向こうから攻撃を仕掛けて来る
ことはなく、事情はこの辺にいる狼の場合も同じだ。
もちろん鹿や猪もいる。



4 峠からのくだりは、
おそらく夏にはさぞかし美しいと思われる
樹木の濃厚な狭い溪谷を縫って進む。
溪谷の底部を流れるのは道志川である。
長又という3、4戸の集落に到着する手前で
溪谷は少し広くなる。

Yamabushi-
toge ▲

5 12時15分には白井平まで3、4百ヤードの
地点まで来たが宿は一軒もない。
汚い小さな農家で昼を食べるが、
家の真中の囲炉裏から出る焚火の煙で目がしみた。
2時に出発。前と同じように、荷物の一部を女性が
「痩せ馬」という道具にくくりつけて背中に背負い運んだ。
それより大きいものは背負梯子といい、
ともに木でできた枠で紐が編み込まれているものだ。

6 初めのうちは
山腹を少しずつ
登って行くが、
その後小川の近くに
おり立つ。
板橋と善乃木
という村落（ともに
宿泊はできない）を
通って2時55分には
神地に至る。

Kanji
Zennoki

Itabashi

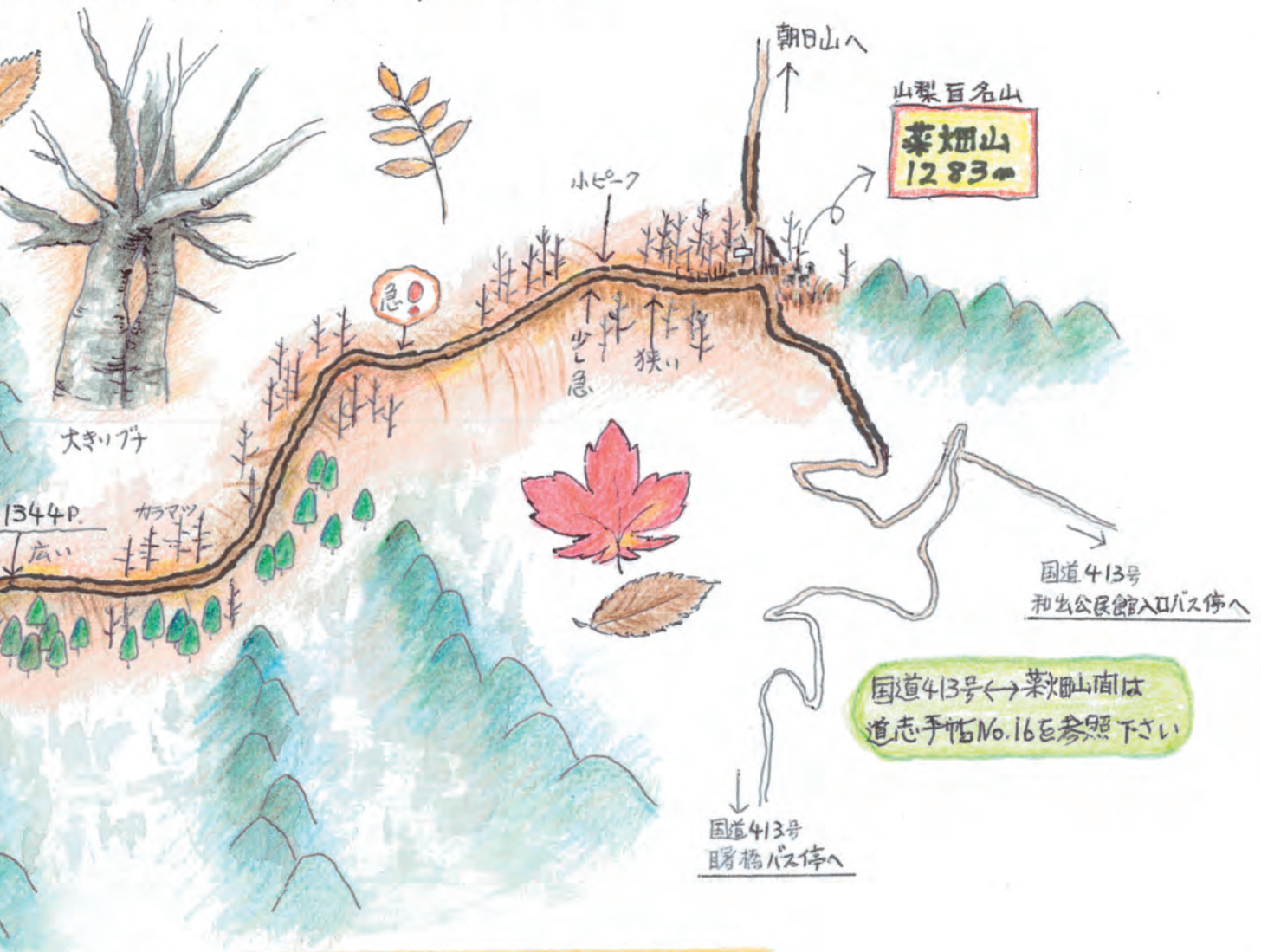
Shiroidaira

Nagamata



痩せ馬

畑山をつないで



道坂トンネル $\xleftrightarrow{80分}$ 今倉山 $\xleftrightarrow{100分}$ 水喰い頭
 $\xleftrightarrow{50分}$ 菜畑山 $\xleftrightarrow{60分}$ 国道413号
 $\xleftrightarrow{500分}$ $\xleftrightarrow{90分}$
 (時間は目安として考えて下さい)

※ 道志村ガイドブック
 登山コース(Eコース)に
 準じます。



作・画 K-CO 2018.2



びっくりする
 凍っていて
 天気予報
 に注意して

今倉山と 菜



道坂トンネル

トンネル↔今倉山間は
道志手帖No.15を参照下さい

縦走路は小さいアップダウンが多いです。

雪、消えたかな？と思われた2月末に歩きました。稜線上は
ほど雪いっぱいでした。場所によってはヒザ下までありました。
滑り易い道でした。里は雪が無くても山は油断できません！
など注意が必要です。この時期は軽アイゼンなど滑り止めを常
山に入って欲しいです。落ち葉の下の小石、小枝、木の根にも要注意！

gallery

小正月のツクリモノ

豊作や山仕事の無事を願って年の始めにつくられる、佐藤家の「小正月のツクリモノ」。
今年1月10日・11日の製作のようすです。本誌15号(10・11頁)と合わせてご覧ください。





協力隊だより

18

このページでは、地域おこし協力隊の活動を報告していきます。

七瀧佳至



谷

相につくった堆肥小屋の一部を移動し、ハウスの中に

温床をつくり、春まきの苗をつくり始めました。微生物による発酵

熱を利用するので、電熱を使った場合のような温度の調整はできません。先の気温を見こした最初の仕込みが肝心だとわかりました。

冬場も野菜の栽培が出来るよう、いずれ農業用ハウスを自分で建てたいと計画しています。



温床で苗づくり (3/5)



この上に透明のシートをかけて保温しています。落ち葉に米ぬかをまぜ、発酵を促しています。温度計を見ると、この日の地温は17度くらい。2月半ばに蒔いた種の芽がようやく出てきました。谷相では、堆肥小屋の上に雪が積もり、融けた雪がガチガチに凍っていました。道志の寒さでは、冬場はハウスが必要だと感じています。

春時きのタマネギ栽培



ハウスのなかでタマネギの苗もつくっています。春時きの苗づくりは昨年うまくいかなかったので再挑戦です。上の写真は発芽したばかりのようす (3/5)。これから2ヶ月。無事大きく育ってくれることを願っています。





3/9 pm ネギの種まき



◀ポットにネギの種をまき、温室に入れて苗をつくります。

▼サーモスタットを利用した電熱シートで、一定の温度を保てる苗づくり用の温室。水菜や漬け菜の苗をつくらしています。



▲冬越しした菊の株。菊栽培も今年で3年目です。



抱井昌史



菊

栽培をしているハウスの利用して、春まきの野菜の苗をつくっています。電気マットを使うと発芽が揃うので便利です。

冬のあいだ菊は株を一ヶ所に集めて冬越しします。暖かくなると新芽が伸びてくるので、それを挿し芽にして増やします。そろそろ新しく購入した蜜蜂が届きます。昨年より規模を増やすので頑張っていきたいです。



3/12-13 蜂蜜入り焼き菓子を試作

蜂蜜を使った焼き菓子・フロランタンを、イベントなどで販売を始めています。この日は3月末に横浜で開催されるイベントに向けて試作をしました。切り分けやすいように型を使用したり包装を工夫したり、改良を重ねています。



スズメバチ捕殺器を製作

養蜂



蜂群が減らないようにするため、今年は蜜蜂の天敵・スズメバチの対策を強化していきます。池谷木工所さんのご協力のもと、スズメバチの捕殺器を20個ほど製作しました。

2/3,5 焼き芋やさんの視察



2月3日に群馬県の焼き芋やさんを訪ねました。軽トラの荷台に石焼き芋の窯を設置して移動販売しているかたです。専用の窯を見せていただきました。(左)／2月5日には、品川で開催されていたイベント「品川焼き芋テラス」に行ってきました。全国各地から焼き芋やさんが出店しているイベントです。平日にも関わらず大勢の人が集まっていました(右上)。焼き芋に砂糖をのせてバーナーで焦がした「焼き芋ブリュレ」が売っていました(右下)。自分でも焼き芋にはちみつをのせるなど、ひと工夫してみたいと思いました。まずは、より甘いお芋ができるよう、栽培方法を見直すつもりです。

鳥澤 拓太



昨 年つくったサツマイモを焼き芋にして販売し、全て完売しました。この冬は各地の焼き芋やさんを訪ね、販売の工夫

や焼き方などを学ぶことができました。今年は栽培するサツマイモの量を増やし、糖度の高い甘いお芋ができるよう、育て方も工夫したいと思っています。

鹿の角でキーホルダーをつくったり、道志の冬を楽しんでいます。

横浜と食の循環スタート



横浜の飲食店を出る食品残渣や横浜ビールの麦芽搾り粕でつくられた堆肥を使って道志で野菜をつくり、それを横浜で消費してもらう取り組みが始まりました。3月14日、堆肥が道志に届けられました。これを使い、夏野菜などをつくりたいと思います。

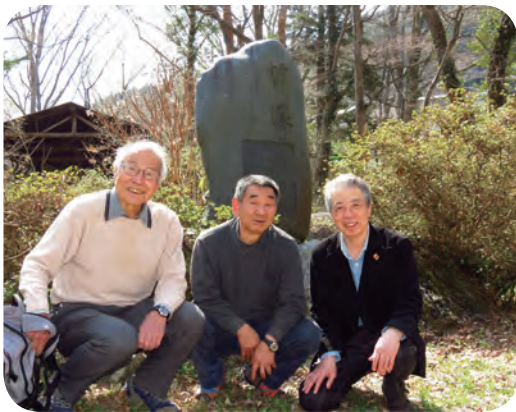


キクイモの収穫・保存

▲畑一面に育てていたキクイモは、あらかじめ収穫を終えました。雪が積もったときも出荷に支障がないよう、掘り出した芋をまとめてネットに入れて土に埋めて保存し、すぐに掘り出せるようにしてあります。

▶収穫に使っていたフォーク(左)。刃がすぐに曲がってしまうので、掘り出し専用の丈夫なものを買いました(右)。





左から、昆虫専門家の河合省三さん、日野出屋旅館の佐藤光男さん、柏田雄三さん（2017.4.14 蜂塚碑前にて）

道志手帖トピックス 蜂塚でつながるご縁

2017年4月、蜂塚（本誌5号掲載）を訪ねて、昆虫芸術研究家の柏田雄三さんが来村されました。柏田さんは全国各地の昆虫にまつわる塚「虫塚」を訪ね、本にまとめられています。今年2月、埼玉県春日部市で開催された、柏田さんによる虫塚についての講演会では蜂塚も紹介され、参加者から「蜂塚に込められた生命あるものへの想いや優しさを感じ取ることができました。それはいつの時代も無くなってはほしくないもの」との感想が寄せられました。本誌をきっかけにご縁がつながったことに感謝です。

編集後記

早いもので、第二期協力隊の活動が始まって2年が経ち、残すところ1年となりました。協力隊の広報誌として発行している本誌も、残り1年でひとまず役目を終えます。今年6月には創刊5周年です。ここまで続けていくことができ、感謝です。残り4号、丁寧ににつくっていきたいと思います。

ます。とはいえ、今号から新連載も始まったばかり。「どうして?」「道志って?」の疑問がある限り、道志手帖は続きます。道志について「こんなことを取り上げてみては?」という題材がありましたら、ぜひ教えてください。ご意見・ご感想をおまちしています。（香西）

野の幸 山の幸

第4回 沢蟹

「お足がたくさんありますように」という意味の縁起物で、お正月料理に使われる蟹。暮れには山へ沢蟹を掘りに行き、甘露煮にして頂く。身の回りでとれるものでお正月料理ができたら素敵です。

身近なジビエ、沢蟹。鹿や猪を狩るのは抵抗がある人も、その辺の沢にいたる2センチほどの小さな体の沢蟹だったら、気軽に捕れるかもしれません。が、見つけるのは大変です。沢の石をひっくり返したり、ちょっと砂を掘れば見つかるのかと思いきや、そう簡単にはいきません。この日はシャベルを片手にひたすら根気よく沢を掘ること2時間。3人がかり（そのうち2人は初心者）で捕れたのは50匹程度。このうち、初心者の私が見つけたのはたったの4匹でした。

それにしても、やっとなことで沢蟹を見つけたときの嬉しさといったら！なかなか見つからず、すぐに諦めてしまいそうになるのですが、「今夜のお



かずには3種類（甘露煮・天ぷら・唐揚げ）食べるためには、少なくとも30匹以上捕らなくては」と思うと、途中で音をあげるわけにはいきませんでした。食べるために探し求め、苦労した分だけ味わえる格別な



おいしさが、山の幸にはあります。▲沢蟹の天ぷらと唐揚げに、ふきのとうの天ぷらとキウイを添えて。唐揚げはバリバリとして香ばしく、甘露煮は中の身のしじみのような風味がすかに感じられました。＊沢蟹が冬眠する11月頃から2・3月にかけてが捕り頃です。

採集・調理指導：レストランたんぽぽ

採集日：3月6日

お仕事拝見 ⑧ 道志茶屋 所長 坂本 雅央さん

道志村と出逢って7年の月日が経ちました。デイサービス
道志茶屋の管理者をしています、坂本雅央と申します。

思い起こせば7年前に、当法人の理事長と2人で道志村役
場を訪ね道志村・デイサービスを展開したい、そう言った
のが始まりです。「出逢いは人生を変える」といった言葉が身
に沁みます。結婚し、長男を授かり幸せな日々を過ごせること
に、とても感謝しています。これからも大好きな道志村に恩返
しができるように道志茶屋を盛り上げていく事をお約束しま
す。皆様も是非1度遊びに来てくださいね。



作画 仲井義品

みなもと体験館イベント参加 ドキドキワクワク体験コーナー ⑧

憧れのスローフード体験、木工体験。道志村に移住してきた私にとって、みなもと体験館でのイベントは毎回未知の事で
いっぱい！ 私のドキドキ、ワクワクをこのコーナーで紹介します。

磨くⅡー未知なる美を発掘するー

今回は「磨く」をテーマにしたもの作りの
Part I として、無垢の樺を磨いた。せっかく美
しい道志川のそばに移住したので、今年は溪流釣
りに初挑戦したいと思っていた所、みなもと体
験館で2月・3月初めにルアー（ヤマメ釣り用）作
り教室が開催されたのでさっそく応募。こちら
も初挑戦！ 魚が餌として認識するには、水中
で光を受けたようにきらきらしている事、スプー
ンのような形状にし、水の流れる所とそうでな
い所を作り出し、弱った小魚が泳いでるように
作るのが大切との事。素材は伝統工芸品の螺鈿
に使われる夜光貝（宇野氏個人所有）。釣り道具と
しては高級品。端にほんの少し虹色が入った貝
のピースを選んだ。サンドペーパーで荒磨きか
ら始め、指導を受けながら機械でカーブを作り、
穴を開けた。徐々に細かいサンドペーパーにし

ながら、手で磨いていく。
生きている魚にルアーを本
物の小魚と思わせるのだから、こちら手抜き禁物と
思いつつ磨き続けると、少
しずつ不思議な現象が起き
てくる。僅かだった虹色の
部分が全体に広がっていく
のだ。宝物が埋まっている
ようで楽しくなる。磨くというのは、まるで神
様が創った芸術を発掘するようだ。仕上げには
樺の時と同じく鹿の皮を使用。ただし、今回は
金属磨きもまぶして仕上げ磨きとなった。あま
りに綺麗なルアー、初溪流釣りで無くすのが惜
しい気になってきた……。 （佐藤八重子）

*みなもと体験館では夜光貝を素材としたアクセサリ
作りも体験できます。

